

洋書輸入協会会報

VOL. 1
NO. 7

昭和42年11月

特別寄稿

9月に来日された英国 Collet's 社の Mr. William Norris より、「日本を訪れて」と題する回想記を頂きました。下記に掲載致します。

JAPAN IN RETROSPECT

How that my vist to Japan is some distance away in time I think I am better able to sum up my main impressions of the Japanese Book Import trade.

During my eleven days I met and talked with 27 import booksellers or their representatives in Tokyo, Osaka and Kyoto. The great majority, whether large or small, appeared to be prosperous, with expanding business and a sharp eye for new developments and opportunities. A number had recently opened new branches.

The people I met, whether owner president or executives working for larger organisations, all appeared to get great pleasure from their work, were keen and lively people intensely interested in their profession.

Specialisation seemed to be the general rule and most booksellers concentrated on meeting the demand for publications, books and journals, covering particular subjects, i. e. science, technology, philosophy, economics, history, law, linguistics, medicine and so on. The minority of general suppliers, although prosperous, did not appear to be doing as well as their specialist colleagues. I think this is to be expected.

I was impressed by the number of relatively small organisations that had engaged in publishing either of reprints or of Japanese editions of foreign books of particular interest to them. This would rarely happen in England.

Presuming the combination of the impressive expansion of Japanese industry, with its beneficent effects on the whole economy and the consequent social programmes, particularly educational, this prosperity makes possible, I see no reason why those engaged in book importing should not continue to expand and prosper.

May I conclude by saying how much I enjoyed meeting everyone and thanking all for their outstanding kindness. I hope that all will enjoy good health and happiness as well as commercial success.

理 事 会 報 告

10月12日（木）

日ソ図書センター、加入審議、再調査の要あり一時保留す。

予約雑誌につき審議。

10月25日（水）

日ソ図書センター、再審議、速急に決論出す事にし保留。

毎月10日の理事会に会計の収支報告を行うことと決定。

引続き総務、経営研究並に会報委員会報告があり各々理事会の了承を得ました。

経営研究委員会報告

総代理店のリストの資料は27社から豊富な資料が集まりました。タイプ印刷は如何にも貧弱なので、あちらこちら安く印刷をして呉れる所を探し、活版印刷でお届け出来ることになりました。11月10日初校を終えた所です。今後追加の向きは逐次会報に掲載して行き、次の版にまとめる方針です。

仕入、販売各担当者や支店の為に、20部 30部 50部と、このリストの御注文を頂いていますが、全然申し込みをされていない会員の方も多数です。お忘れではないかと思います。大部数の御申し込みをお待ちしております。 洋販・栗原

雑誌資料委員会報告

当会報 No. 5 に引続き11月10日現在、下記の通り来年度雑誌価格についての返事乃至型録が到着しております。御利用願います。

Academic/AIP/Amer. Nuclear Soc./Amer. Psycho. Ass'n/Grune & Stratton/I. E. E. E./Int'l Arts & Sc. Pr./Lippincott/Mosby/Wistar Inst./U. S. Gov. Printing Office/Moor Cottrell/British Med. Jnl./Dawson/Grampian Pr/H. M. S. O./Inst. of Physics/Oxford U. P./Pergamon/Taylor Francis/UNESCO/Almqvist/Vlg. Chemie/Excerpta Medica/Karger/Muelenhoff/Nijhoff/North Holland/Springer, Berlin/丸善/紀伊国屋/海外出版/国際書房/日本出賃/三洋出版/南江堂。 出賃・村山記

関 西 だ よ り "十月"

協会事務所開所以来会員相互の各方面に渉る協議のため、会議の申し込みが相次ぎ本月中の事務所使用回数は13回に及んだ。

協会で行う適正価格証明事務も本月より開始す。証明書発行数回。

会員有志による共同型録の作製計画其の後順調に進み10月21日最終的に編集を終了し、10月28日より印刷行程に入る。
(尚仕上り予定11月末の予定) 関西支部・川畑

東海懇談会だより

目下、最盛期のため、各社とも大変忙しく、なかなか全員揃う機会がありませんので、情報交換、業務慰労のため、去る10月27日、当市芝金に於いて、臨時懇談会を開催いたしました。

出席者は10名（7社）で、話題は特にありませんでしたが、和気藹藹のうち、各社の親睦を一層深めたようでした。

（丸善・名古屋支店 佐野）

「米書だより」編集部の一隅から

米国大使館広報文化局 露 木 栄 子

「国と国との間に文化の交流がおこなわれ、おたがいに新しい発見と検討をすることが、さらに新しい文化を創造し、全人類が共通の目的に向かって進む基礎をつくる」という、たいそう大きな理想のもとに創刊されたこの小さなアメリカの書籍紹介の月刊誌の第1号が、東京の米国大使館広報文化局から刊行されたのは、いまから15年まえのことである。それから毎月、アメリカで出版された新刊書を紹介しつつ、この12月には、第176号が刊行される。発行に際してかかげた高邁な理想は、いまだに、遠くはるかであるけれども……

毎月、約500点の新刊書がアメリカでは出版されるが、そのなかからこんな本が最近アメリカで出版されたということを日本の読者にぜひ知って欲しいと思うものを約20点あまり選んで紹介することと、新しく日本で邦訳、出版されたアメリカの本を紹介することが、「米書だより」の主な役目である。このほか、アメリカにおける出版界や文化活動のニュース、アメリカでベスト・セラーになっている本のリストなどによって、今日のアメリカ文化のアウトラインをできるだけ具体的に紹介することにも努力している。

毎月、アメリカから多数の新刊書が編集部へ送られてくる……取り澄ました組のクロス装幀の本、派手なジャケットをかけられた陽気な本、ペーパーバックの軽やかな本、大型の豪華本等々、いずれもそれぞれの表情を豊かにたたえている。そして、このなかからどれを紹介するか決める

ことが、毎月、最大の楽しみであり、悩みでもある。目まぐるしく変わる世界状況を分析した本。人類の明日の生活を予想した本などは、まず、ともあれ紹介したいし、自然科学、宇宙科学、電子工学の目覚ましい進歩を解説した本、オートメイション、マス・コミが私たちの生活に及ぼす影響を論じた本も選びたいし、過密都市、大気汚染、水飢饉などの都市問題と取り組んだ本の一群も、今日の日本では大いに参考になるであろうし、アメリカで目下評判になっている新しい文学作品、また美術、音楽の新しい動向を伝える本も、ぜひ載せたいと思う。そしてこれらの優れた興味ぶかい本の書評の数を「米書だより」の限られたページ数まで絞らなければならないことをいつもながら嘆くのであるが、それでも、できるだけ良い本を選んで、これらの本を通して、アメリカの現在の本当の姿、今日のアメリカ人が何を考え、何を求めているかをできるだけ素直に伝えなくてはと思う。

ページの片隅の思わぬところから不意に出現して私にショックを与える校正の見落としや、油断をすればすぐ遅れがちになる刊行予定日など、編集の仕事につきまとうさまざまな小さな苦勞にとりかこまれながらも、毎月、机の上へ、海を渡って運ばれてくる印刷インクの香もすがすがしい新刊書を手にするごとに、次号が無事に刊行されて、読者の手にわたり、私たちの小さな書評誌によって、一冊でも多くの洋書が読まれる機会を作るお手伝いができればと、心から思うのである。

会 員 紹 介

“早く、安く、良い本を” (株) ホンリユウ・コーポレーション

新宿に程近い明治通に面した倉庫にはガゼーリーマガジンやモード雑誌が多い。ポケットブックや絵本もある。一般の人々へのコピーセールの会社だから書店の店頭で売れるものに重点がむかわれている。今でこそ街の本屋で外国雑誌が陳列されているのを見かけるが、13年前にはどの本屋へ行っても洋書など関係ないと素気なく断られずいぶん苦勞をしたそうである。大衆が気軽に買って行ってくれるものはやはり目に訴える程度の高くないものが多い。これはどこの国でも同じと見える。ホンリュー社は洋書人の使命である文化の交流の中で一番の底辺をうごめいているようであるが、こう云う洋書人が現われたのも戦後の特徴と言えよう。よく話題になる性出版物の限界について居村社長は、日本人を子供扱にせず問題を大らかに享受し、それをつきぬけて次の文化へ進むべきではなかろうかと述べて居る。又 Gun Digest 年鑑の日本代理店だったことから Gun 業界にも入り、日本で初めて精巧な Gun Model を作ったところ、ちょうどブームに乗って今ではその方も可成り忙しい。洋書人と Gun Model — この関連づけはホンリュー路線の一端である。確たるオリジナリティを以て、いつもまともな仕事をしている筈なのに、それが素直に受入れられなかったこともしばしばあったようだ。然し居村社長は、今後共各書店へ『早く、安く、良い本を』を合言葉に同業界に愛される良き Distributer として成長して行くことを願って居られた。

洋書こぼれ話

明治回顧 (三)

福本初太郎

国会議員の読書

国会議員は本を読まない。という命題は業者間一般に認められよう。これは明治時代も今もかわらない。学者の議会員は別として一般の代議士は、まず、本を読まない。国会図書館ができて今年で二十年になるが、かつてN司書官から、代議士の同図書館の利用率の貧弱なことを聞いた。そのなかで、よく丸善へ来られた明治時代の政治家を思い起こしながら挙げてみれば、伊藤博文、後藤新平、渡辺千秋、青木周蔵、南弘、水戸寛人、江木翼、徳川家達、下村海南、大石政巳、清水澄、都築馨六、石渡敏、小寺謙吉氏等の人びとである。このなかでの変り種は小寺謙吉氏であった。この人は神戸の大地主で憲政会の代議士、落選後は神戸市長になった人だが、いつも同じ本を二冊づつ買っていく。初めは不思議に思ったが、それは一冊を秘書に読ませたり、訳させたりして勉強していたことがわかった。そして、読みおわると一冊を母校の早稲田大学に寄贈してしまう。まことに賢い金持ちの読書法である。

独乙人捕虜の読書

第一次世界大戦の結果、膠州湾の青島より独乙人捕虜の一部を浅草の東本願寺に収容したのは大正三年の暮だった。その捕虜のなかにはワルデック総督を初め、ユーベルシヤール、ウェークマン等の学者もいた。ウェークマンは、すぐに四国松山の収容所に移され、講和後日本人と結婚し、陸軍大学、日本医大そのほか数カ所で独乙語の教師をし勲四等旭日章を受章し、4、5年前に死んだ。ユーベルシヤールは大阪医大で永く独乙語の教師をしていた。

この連中が、東本願寺の収容所にいたある日、収容所から丸善に電話があって「独乙人捕虜が本を読みたいというから独乙人向きの本を持って来て呉れ」とのことであった。そこで、まず独乙語で書いた、日本案内、日本の歴史、地理、日本の物語、さては独和辞典まで、ありとあらゆる「日本」と文字のついている本をかき集め、人力車の底がしなう程積み込んで収容所に乗り込んだ。当時捕虜は金はたっぷり持っていたが外出は許されなかった。つまり宝の持ち腐れというところ。そこで考えたすえ、本を買うことに決めたものらしい。私は収容所の衛兵に電話の旨を告げ、兵に案内され途中幾度か番兵に誰何されながら収容所長大島大佐の部屋にいきついた。そこで誓約書に署名捺印をさせられた。その誓約書を今でもウスウス憶えている。

1. 収容所内の状況を外部に洩らさぬこと。1. 捕虜から手紙の依頼を受けぬこと。1. 金銭、物品を貰わぬこと。等であった。まあ、そんなことはどうでもいいのだが、私がここに書きたかったのは、その時、オン・アプロバルした本が汚れていようが、破れていようが奪いあうようにして一冊残らず現金で売れてしまい、とんだ棚掃除になった。

雑誌「白樺」派の人びと

「白樺」が創刊されたのは明治42、3年だったと思う。最初の同人は志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎、有島生馬、里見淳こと山内英夫、木下利玄、児島喜久雄、柳宗悦、園池公致、正親町公和、荻野二十、細川護立氏の十二人で後に小泉鉄と長与善郎氏が加わった。

同人はいずれも学習院出で、有島武郎氏の札幌農学校や、有島生馬氏の東京外語から東京美術学校へ行った人は別として、多くは東京帝大へ入学した。ところが志賀さん、無車さん、木下さんなどは「大学の講義なんてつまらないものだ」と言ってすぐやしてしまった。東京帝大へ入学できれば鬼の首でも取ったように考えられていた時代だったのに。

「白樺」の創刊は、当時そろそろ下火になりかかった田山花袋、国木田独步、徳田秋声、岩野泡鳴、正宗白鳥氏のような、所謂「自然主義」と言われた作品に対して人道主義的な作品を発表し、トルストイ、ホイットマン、ロマン・ローラン等を矢つぎばやに紹介したが、それよりも私は、同人が後期印象派の絵を日本に紹介した業績を高く評価したい。なかでもルノアール、セザンヌ、ゴッホ、マネー、マチスなど。又、ロダンの彫刻をも日本に紹介したのはこの白樺派の人たちであった。

私は「白樺」の毎号のさし絵の輸入について折々、麻布三河台の志賀さんの家や、麻布市兵衛町の柳さんの家で相談に与かった。最初は独乙のゼーマン社のリプロダクションを輸入したがどうもお気に召さない。そこで種々調べた結果漸くイタリアのアンデルゾン社を発見して皆に喜ばれた。

その後「白樺」同人十二名の署名入の立派な感謝状に添えて三越の金十円也の商品券を貰った。今、この感謝状があると随分面白いのだが、惜しいことに、さる空襲で焼いてしまった。

海外 ニ ュ ー ス

◎McGraw-Hill と Penguin Books

McGraw-Hill は英国の Penguin Books の未払通常株の10%を獲得した。価格は秘密にされているが、ヨーロッパの投資者グループから買ったもの。McGraw-Hill の Shelton Fisher 社長はこの購入を「ヨーロッパの非常に尊敬されている出版社に対する McGraw-Hill の投資」と称している。(Bookseller 67—9—16号より)

◎英国における書籍消費の躍進

H. M. S. O. 刊行の中央統制局編青書の最新版「1967年度国民所得と消費高」によると、国民の全消費高は1956年 £13,662 (百万単位、以下同じ) から1967年は £23,709 に増加した。そのうち書籍は1956年の £44 から1967年は £92 に増加した。車は過去3年に漸減しているので、Economist 誌は「車から書籍へ」という見出しで国民の書籍購入の力走を報じている。(Bookseller 67—9—23号)

◎フランクフルト図書市

10月12日から17日まで行われたが、段々規模が大きくなって行く。参加国とスタンド(売店)の数は今年は従来の記録を破った。

参加国49、出版社の個人スタンド 1,862 (これは1966年より165多い)団体展示2,845社(1966年は2,593社だった)崎さに反してソ連と東独も参加した。

(Bookseller 67—9—23号)

◎東 独 の 出 版

東独は1966年中に人口一人当たり6冊の書物を出版し、書物生産の最高記録を作った。

点 数 5,310 部 数 105,000,000

書物1版の平均印刷部数は19,800に上昇した。

部門別によると

小	説	994点	18,000,000部
産業、科学技術、手芸		504点	3,000,000部
青 少 年 書		476点	13,000,000部

(Bookseller 67—10—7号)

◎イギリスの出版

1967年9月	合 計	2,769点
(1966年9月)		2,484点)

1967年1月から9月まで	合 計	21,753点
(1966年1月から9月まで)		21,450点)

(Bookseller 67—10—7号)

◎アメリカの出版(1～9月)

	新 刊	重 版	計
1966年	14,574	4,824	19,398
1967年	15,292	4,900	20,192

(Publishers Weekly 67—10—2号)

◎英国と日本の書籍貿易

1966年、英国は日本から £199,000 の書籍を輸入し、日本へ £510,000 の書籍を輸出した。1967年の前6ヶ月は両国間の書籍貿易の著増を示す、英国は日本から £193,000 を輸入し日本へ £253,000 を輸出した。

なお、日本の世界との書籍貿易の全額は

1966年度、輸出 £3,472,000 輸入 £5,298,000

1967年の前6ヶ月は輸出 £1,985,000 輸入 £2,460,000 であった。(Bookseller 67—10—14号)

——紀伊国屋書店提供——

会 員 紹 介

“フランス書とともに半世紀” 株式会社 白水社

フランス語の白水社は、今年の11月で創立年52を迎える。洋書部を設けたのは大正14年、小川町明大通りに間口4間奥行4間ほどの売場をもち、文芸書、辞典はもちろん美術、楽譜までもおき、体裁は一応整ったが営業成績は悪く赤字つづきであった。昭和のはじめ、玉川一郎氏が洋書を受持っていたが、不景気でファイトをなくした時代もあった。その後出版活動が活潑になり、洋書まで手がまわらなくなって縮小し、先生方や読者の注文だけを取り寄せて業務を継続していた。昭和34年に現在の社屋が完成し、出版の方の営業成績の上昇とともに洋書部も拡充し、業績も上ってきた。現在は入社以来洋書部を受持つ本田喜恵氏が、親切、迅速をモットーとして張り切って業務を掌握している。10月に販売部のスペースを拡げたので洋書部も広くなり、先生方への便宜はもちろんのこと、地方の読者にもよき相談相手となるべく努力をつづけて、その発展を今後に期している。

NEWS 欄

■ ヘンリー・エム・スナイダー株式会社日本代表吉岡氏
退職・新たに柴田牧人氏が着任されました。

事務所：東京都新宿区十二社 272 Tel (377) 6691
(自宅)

■ 米 Ginn 社 Mr. Don H. Smith 10月中旬来日。

■ 米 Harper 社 Mr. Emile Dubrule 10月中旬来日。

■ 英 Penguin 社 Mr. David M. Rogers 10月中旬来
日。

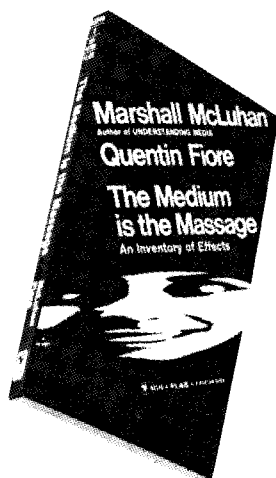
■ 仏 Hachette 社 M. Jean Claude Levy 11月上旬来
日。同氏は M. Max Dujardin 氏と交代され日本担当
になられたもの。11月2日に東京において、11月6日に
大阪において夫々関係者が集まり、懇談会を開催した。

■ 英 Longmans 社 Mr. J. A. E. Higham 11月上旬来
日。

■ インドの社会科学関係の出版社でありかつインド書
籍、定期刊行物の Distributor である
People's Publishing House (P) Ltd.
の General Manager である Mr. Pisharodi が、11月
20日に来日の予定。

話題のマクルーハン

バンタム版・大量入荷！



The Medium is the Massage

M. マクルーハン著 700 円

WESTERN PUBLICATIONS DISTRIBUTION AGENCY



日本洋書販売配給株式会社 (洋販)

東京都新宿区西大久保 3 10 電話・東京(202)4461(代)

昭和 42 年 11 月 第 7 号 洋書輸入協会 編集者 寺久保 一重
東京都中央区日本橋江戸橋 1-15-5 藍沢ビル 302 号室 電話 271-6901
関西支部 大阪市北区芝田町 28 才一山中ビル 電話 371-5329